

【ほ】 崩壊土地は地名にあり、先人が残してくれた遺産

先人が、地名やモニュメントで災害の恐怖や教訓を伝えた例があります。自分たちの地域がかつてどんな地名だったのか、石碑や神社などに災害に関するものがないかなども知っておいてほしいと思います。さまざまに変更され土地の歴史が埋失されつつあり、災害文化の継承も大きな防災や減災への道しるべです。

平成 26 年 8 月の広島土砂災害では、八木地区で土石流災害で甚大な被害と犠牲が発生し、その後平成 30 年 7 月の西日本豪雨でも再度災害が発生しました。この地区一帯はマサ土といわれる地質で谷筋に開発された住宅地です。古くはこの辺一帯は、八木蛇落地悪谷（やぎじゃらくちあしだに）といわれていたのが、のちに八木上楽地芦谷（やぎじょうらくちあしだに）に代わり、現在は八木〇丁目となっているのだそうです。せっかくの意味ある地名が隠れてしまっています。（悪谷の地名は当初はついていなかったようです。広島県 HP）

【へ】 変は変災、天変地異 相手を怒らせずにかわすには

自然災害は止めることができません。ある意味で地球が生きているからで、それがなくなるときは地球が冷たい星になった時でしょう。地球には大きなサイクルがあって、そのサイクルにはまた別のサイクルがあってというような気がしますが、一生のうち数回遭遇する大規模災害は周期があるというものです。むずかしく言うと、天災は人間の文明や生物の生息を脅かす自然現象、変化であり、その原因をなす天文・気象現象が天変、地学的現象が地異で、天変地異ということです。これらが、我々の暮らしにかかわるということになると自然現象が一方的なのかということ、実はそれを助長している作為が人間の側にあることも多いのです。

【と】 都市は災害に対して脆弱になっています

都市には災害の対象となる資産やインフラが集中していますが、それに対する災害対応が追い付いていません。建物や施設の耐災性、自然環境との不調和、土地利用マネジメントの不適切さ、社会インフラや公共サービスへの過度の依存、あらゆる機能の一極集中、人口流入、過度の開発などが山積しています。防災を考慮しないでいると、いわゆる多臓器不全を招く習慣病となり、顕在化した時にはその後の対応が難しく、高コストとなります。なんとなく、都市で暮らしていると自然に対する日常生活的知恵がどんどん退化しているような気がします。

【ち】 地域防災への関心は自助の向上にもつながる

平常時はなんの関心も持たないことは、いざという時には行動へ結びつかない。行政はすべてを対応できないので、共助が極めて重要であることは、多くの災害時に実証されています。何ができて、何ができないのか。地域防災は様々な定義はありますが、最も狭い意味では、地域住民が主体的に取り組むものと考え避難所、災害時要援護者、自主防災組織といったものになります。これらの問題点や課題を明らかにして取り組む必要があると思います。町内会や自治会などが組織や体制をつくっていますが、実際に災害が発生した時に機能するのかどうか、一度確認しておく必要があります。